

現代ギター 493号は2005年12月1日発行の特別号です。平成17年12月1日発行（毎月1日発行）

クラシック・ギターを楽しむための情報誌

# 現代ギター

# 12

December

2005

No.493

GENDAI GUITAR MAGAZINE

<http://www.gendaiguitar.com>

2005年を語る

## 大萩康司

瀧田滋郎対談

## クリスマス・ハーキング

今月の楽譜

- メロコリー・ガリバルド (タウランド)
- ロマンスの響り (藤井敬吾)
- うたふた (藤井敬吾)
- 半分の夢翼のガヴェット (藤井敬吾)
- カヴァチーナ (マイヤース)
- パウアーナ (サンズ)
- マリアのひびに聴くこの子は? (イギリス古謡)
- 朝日 (キャニオン)
- 睡蓮水鏡詞 (パッヘルベル)
- 6つの二重奏曲Op.24よりロマンス (ガル)
- 甘い風 (香内儀生)
- わが島の歌えたいし歌 (ドヴォルザーク)
- グラナイーナ (モンターヤ)

最先端技術の中に伝統が生きる

# スペイン ギター工場レポート

①

9月上旬、スペイン・ギター製作家組合 (Gremio de Maestros Artesanos de la Guitarra Española, 略してGMAGE) 主催、スペイン貿易庁 (ICEX) 協力により、日英米独4カ国のギター雑誌記者を招いてのスペインのギター工場見学ツアーが行われた。本誌も招かれて私が記者として参加させていただいたので、短期連載レポートとしてお届けする。

■レポート&写真：中里精一

Report&Photo：Seiichi Nakazato

軽快なフットワークでハイテンションとハイブリッドの接着をこなすロドリゲス工場の工具、ハイテク設備の中でこのようにつくっていく様子も印象的だ。



## ●量産ギターは大切な基盤

というわけで9月4日出発、11日帰国という日程で正味5日間のスペイン取材旅行(筆者にとって実はこれが初めて!)に出掛けた。選んだのはマドリッドやグラナダなどの有名な巨匠たちではなく、トレドからバレンシア地方の量産ギター工場の数々である。量産即ち安物、と連想されるかもしれないが、これらスペインのメーカーは低価格帯から高級品まで幅広く生産している。ギターマニアの興味の対象ではないかもしれないが、量産ギターはギター界の底辺を支える大切な基盤である。ギター愛好家のほとんどが、最初は安い量産ギターからスタートしているのではないだろうか。その段階でギターが最低限必要な性能を備えており、楽しく練習が続けられるならば、そのユーザーは上述と共にさらに良いギターを求めて、着実にギター愛好家に育っていくことになるのだ。

スペインはギターの母国と言われる。プロフェッショナルが使用する個人製作の銘器たちは当然のことながら、アマチュア用の量産ギターもスペインは古くから一貫して生産してきた。日本は戦後の

ギターブームを迎え、30~40年前に量産ギター製造に参入し、一時は世界一の生産量を誇った。しかし人件費の上昇に伴い低価格を維持できなくなり、ギター工場は人件費の安い韓国、台湾などに移っていった。現在に至って「世界の工場」と呼ばれる中国が台頭。衣料品や電気製品同様、とにかく中国製品は桁違いに安い。現在、日本でも最低価格帯で売られているクラシック・ギターは、ほとんど中国製であろう。今回のスペインのギター工場見学ツアーはそういった現状への対策の一環とすることができる。

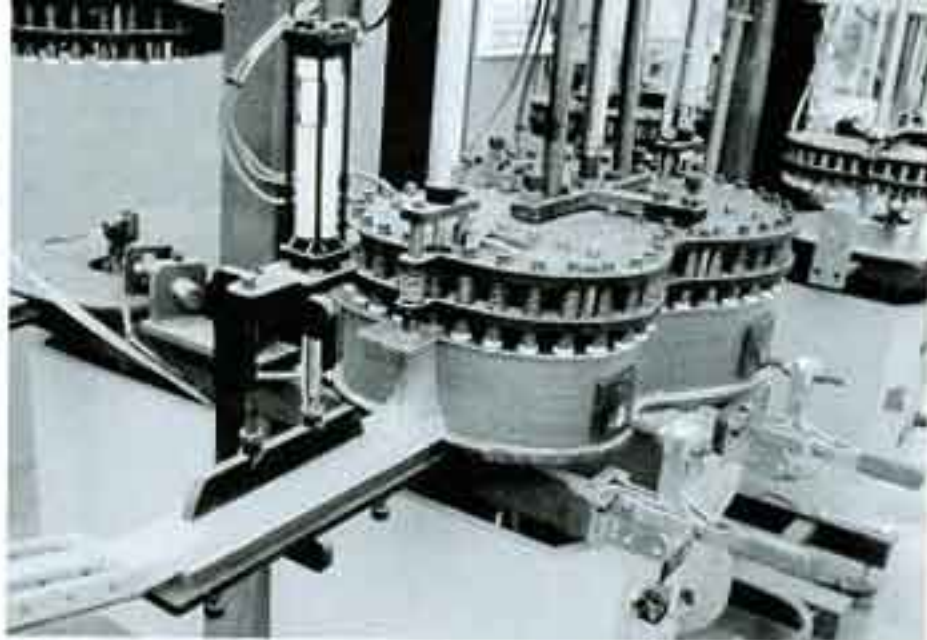
GMAGEには現在15社が加盟しているが、今回我々が訪問したの

は以下の7社(訪問順)。Guitarras Manuel Rodriguez & Sons, Vicente Carrillo, Guitarras Almansa S.A., Raimundo y Aparicio S.A., Guitarras Pco. Esteve S.A., Guitarras Juan Hernandez S.A., Manufacturas Alhambra S.L.

伝統的な手作業を主とする工場、最新設備の機械を導入した工場、それぞれに



スペイン式組立型による工法。右側は外型も併用。表面板中央に乗っている黒い物は表面板のドーム形状(膨らみ)を保つための重し(カッリジョ工法)



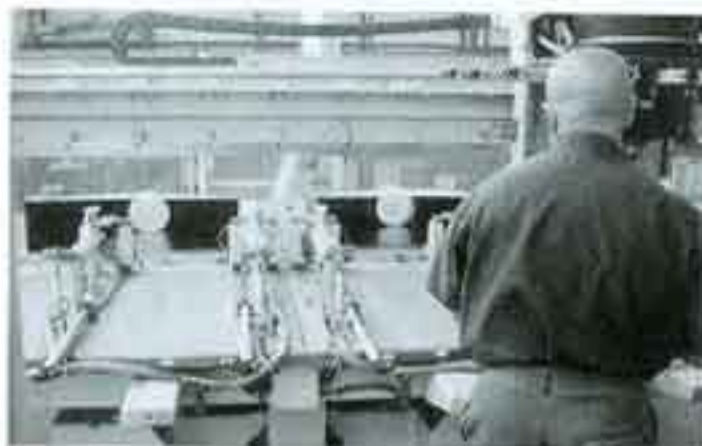
個性はあるが、基本的には合理性を第一とする工場ライン。そこに共通する最大の特徴は「スペインの伝統的工法」である。

#### ●スペイン伝統的工法とは

ギター製作、特に量産には外型を用いてボディを作り、その後ネックをアリホソ後ぎ（ダブテイル）で装着する、いわゆるドイツ式と言われる方法が合理的とされている。しかしスペインの伝統的ギター製作法は、表面板とネックの角度をあらかじめ設定してあるソレラ（型板）という板を用い、そこに表面板、ネック、橋板、裏板、という順に組み立てていく。ドイツ式では最も熟練を必要とするネックの仕込みが、スペイン式では最初から決まってしまう利点がある。さらに、スペイン式ではネックとヒール、ブロックが一体となっており、ドイツ式よりも弦のテンションに対する強度があり、それが音質にも反映するとされる。しかしこの方式では橋板の形状（曲線）を設計通りに保持するのがむずかしく、これを解決するために型板と外型を合体させたりもするが、いずれにせよ手間がかかる方式ではある。あえてそこにこだわるのがスペインの伝統というわけである。

#### ●マヌエル・ロドリゲス

堪能な英語を喋る長身の美人ガイド、チルーカさんの案内のもと、バスはマドリッド市街を抜けて西に向かい、1時間ほどで首都トレド近郊のマヌエル・ロドリゲス親子の工場に到着。5年前に移転したというこの工場、巨大である。日本では自動車工場、いや、飛行場の格納庫



写真左上：「ネック材はセトロに張る」と語るマヌエル・ロドリゲス社長

写真右上：圧縮空気シリンダーによる裏板締め、周辺部はパネが並び、調整ができる（ロドリゲス工場）

写真左：NCルーターによるネック成形が済んだところ、一度に6本のネックが自動的に削られる。作業中は危険なので金網が閉じて立ち入り禁止となる（ロドリゲス工場）

のイメージ。屋根は天窓を多く採り照明なしでも十分に明るい。内部は素材から仕上げまで全体を4分削し、最新鋭の工作機械が稼働している。規模、設備の両面でスペインのみならず世界でも最前線を行くギター工場のひとつではないだろうか。社長のマヌエル・ロドリゲス氏は79歳にして現役。自分専用の製作室を持ち、長年保存してきた貴重な材料と独自の工具を自慢げに見せてくれる。

素材の粗削り段階で異彩を放つのがコンピューター制御のNCルーター。高速回転する刃がロボットアームの如く正確に動いて一度に6本のヘッド、ネック、ヒールを一気に削り出す。そのために正確な位置に素材を固定する必要があるが、ここでは圧縮空気による押さえ治具を利用。この方式は他のあらゆる場面でも利用されている。クランプを回す必要もなく、力の掛け具合も調整自在。

2階の製品展示室には創業100周年記念モデル（100本限定）を初めとしてクラシック、フラメンコ、エレアコ、フォーク、マカプフェリ・タイプなど、本来の意味でのアコースティック・ギターのすべてが置かれている。メインはクラシックとフラメンコのギターのようなが、

すべて表面板は単板。ネックにはマホガニーを使わずセドルを用いている。このあたりに品質に対するこだわりが見られる。

取材初日はロドリゲス工場1件でおしまい。午後2時頃から近くのレストランで昼食をご馳走になった。ハモンセラーノ（生ハム）、チーズをつまみにワインを頼み、サラダ、炒め物、煮物と、美味しい大皿料理の数々が運ばれ、ご当地名物という子豚の蒸し焼きをメインに、デザート、コーヒーで締めくくるときには3時間近く経っていた。ロドリゲス社長は我々若者（？）に負けない健啖ぶり。かつまた陽気に喋る。生誕現役のパワーの源はここらにありそうだ。そしてこの秋連の昼食会がその後連日行なわれ、我々一行は行く先々でご当地自慢の料理で歓待を受けた。大いなる実家ではあったが、1週間でも2キロくらい太ってしまった。スペイン旅行は「食べ過ぎ-肥満」にご用心。

#### ●ビセンテ・カリージョ

翌日はトレドから南西にバスはひた走り、3時間ほどでクエンカ地方のカッシマール・カッシマール Cassimarro にあるビセンテ・カ

## A Report of Spanish Guitar Factories

リョの工場に到着。この町では18世紀からギターが作られ、現在に至るまで50件以上の工房が存在したという。それゆえカッシマールは「ギターの町」と呼ばれ、町の中心部にはギターをモチーフにした記念碑が建てられている。曾祖父の代からギター作りというカリョの工房は閑静な表通りに面した3階建ての建物である。1階に製材用などの基本的な電動工具があるが、2階、3階は5人の職人たちがほとんど手作業で製作をしている。1963年生まれのプロセ・カリョはいかにも実直な職人風。地元の伝統の他にマドリードのアンヘル・ベニート・アグアドと親交を結び、ラミレス門下のホセ・ロメロにも指導を受けた。レジソ・ラッカー塗装、合成接着剤などの使用は伝統より合理性を採っているが、材料はすべて単板を用いており、カリョ・ギターは量産というより、高級手作品と言ったほうが正しいだろ

う。特にカリョのフラメンコ・ギターは最近バコ・デルシアが使用するなど、人気があるようだ。フラメンコ・ギターに精通した製作家が作るクラシック・ギターには、独特なスペインの音色が漂う。試奏した印象でもそれが顕著で、明るい音色でよく鳴る楽器であった。

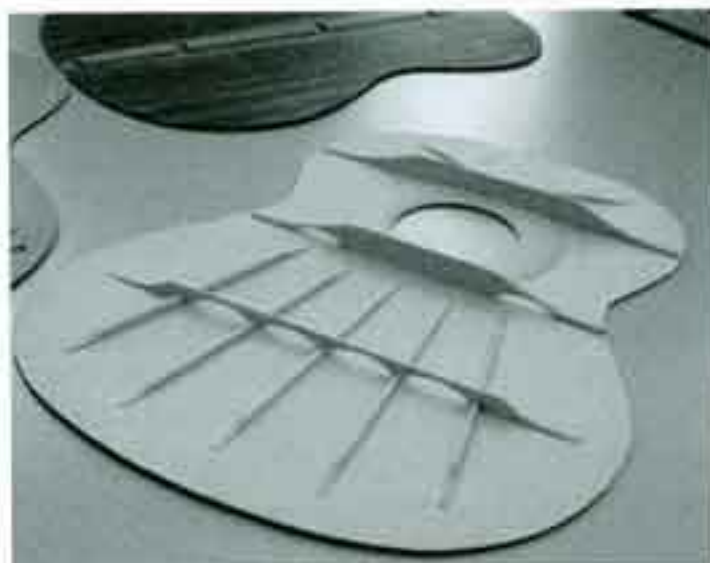
### ●ギターラス・アルマンサ

トレドから東のバレンシアに向かう途中、アルマンサという町の名を冠したアルマンサ・ギターを訪問。ペドロ・アンヘル・ロベス社長(40歳)が出迎えてくれた。1987年創業という同社は工場というより高級マンションのような凝ったデザインの建物。内部は最新鋭の機械が並び、素材から完成品まで、32人の工員が年産21,000本という大量のギターをこなしている。日本にも自社ブランドで年間500~600本を輸出しているという。多くの工程が機械化されているが、相変

わらず古典的なのはパーフリングとバインディングの接着。これだけは他のどの工場でもロープを巻き付ける方式だった。板を外枠とボディの間に打ち込んでパーフリングとバインディングを固定する方法もあるが、スペインではまったく見られなかった。これも伝統の成せる技であろう。アルマンサ・ギターはハカランダ単板使用の高級機種もあるが、こうして日々大量に作られているのは当然ながら低価格帯の製品である。最も競争の激しい部分で勝ち抜くにはやはり品質、音の良さである。とロベス社長は胸を張る。

この日はカリョ氏とロベス氏、それぞれに昼食をご馳走になった。1日2回の昼食。しかし、それをこなしてしまう我が胃袋もすでにスパニッシュ・スタイルに適應してきたようだ。次はどうなる？

(続きは次号)



写真左上：取材時に説明するピセンテ・カリョ社長  
 写真左下：通常はカ木の下になるブリッジ・プレートを上にして表面板との接触を最小限にしている。これこそ本場のブリッジ（橋）？（アルマンサ工場）  
 写真中央：伝統的なロープ巻き方式によるバインディング。パーフリング接着。スペース効率が良いことも量産では重要な（アルマンサ工場 Photo:Merche Gonzalez Herren）  
 写真右：アルマンサ工場入口前にてペドロ・アンヘル・ロベス社長（Photo:Merche Gonzalez Herren）